

氏名	香取潤哉
学位の種類	博士（書道学）
学位記番号	博甲第86号
学位授与年月日	2011年3月18日
審査研究科	文学研究科
論文題目	近代日本における六朝書の受容と展開 —日下部鳴鶴の活躍とその影響を中心に—
論文審査委員会	(主査) 大東文化大学教授 古谷 稔 (副査) 大東文化大学教授 安達直哉 (副査) 大東文化大学教授 河内利治 (副査) 大東文化大学教授 澤田雅弘 (副査) 大東文化大学教授 高木厚人

#### 香取潤哉 博士論文 審査報告

香取潤哉氏は、1978（昭和53）年8月14日、千葉県生まれ。2002（平成14）年3月大東文化大学文学部中国文学科卒業（文学士）、2003（平成15）年3月大東文化大学文学専攻科中国文学専攻修了。2004（平成16）年9月国立台湾芸術大学大学院造形芸術研究所中国書画組碩士班〈修士課程〉入学、2006（平成18）年6月 国立台湾芸術大学大学院造形芸術研究所中国書画組碩士班〈修士課程〉修了（芸術学修士）、2008（平成20）年4月大東文化大学文学研究科書道学専攻博士課程後期課程入学、現在に至る。

職歴は、2002（平成14）年1月東京国際大学附属日本語学校非常勤講師（～2003年8月・書道）を経て、2006（平成18）年9月より台湾・真理大学通識教育学部非常勤講師（～現在）、2007（平成19）年2月より台湾・世新大学日本語文学系非常勤講師（～現在）、2008（平成20）年2月より台湾・台北市士林社区大学非常勤講師（～現在）、2008（平成20）年9月台湾・真理大学応用日本語学系非常勤講師（～現在）を歴任する。

同氏は日本書学を専攻し、特に近代日本書道史に重点を置いた研究を進めているが、その主な成果として、

- ① 日下部鳴鶴『枋橋建学碑』の書風研究」（『書道学論集6』大東文化大学大学院書道学専攻院生会 2009年3月）
- ② 陳丁奇の書学と日本書道」（『書道学論集7』大東文化大学大学院書道学専攻院生会 2010年3月）

③ 台湾日治時期的日人書家活動與足跡—以山本竟山的書法成就與對台灣影響為例—  
（『二十世紀台灣書法發展回顧 學術研討會論文集』國立台灣藝術大學・國立歷史博物館  
2010年5月）

④ 台湾日治時代における日下部鳴鶴と門流書家の活動と影響  
（『書学書道史研究20』 書学書道史学会 2010年9月）

以上のほか、学会での研究発表、および未発表の成果も取り入れながら、このたび『近代日本における「六朝書」の受容と展開—日下部鳴鶴の活躍とその影響を中心に—』の題目によって研究成果をまとめ、博士学位論文として提出する運びとなった。

## 1、論文の要旨および特色

本論文の構成を概観すると、【研究篇】と【資料篇】の両篇から成る。目次の概要は以下の通りである。

### 【研究篇】

#### 序章

#### 第一章 近代東アジアの書史と「六朝書」

第一節 近代中国書法史と「六朝書」（清～中華民国）

第二節 近代日本書道史と「六朝書」（幕末～昭和戦前期）

第三節 近代台湾書法史と「六朝書」（明・清・日本統治時代）

#### 第二章 日下部鳴鶴の書業と書法の基盤

第一節 鳴鶴の生涯

第二節 鳴鶴の書業—日下部鳴鶴碑刻本と自筆本—

第三節 鳴鶴の学書論

第四節 鳴鶴門流書人と鳴鶴書法の継承

#### 第三章 近代の日本書壇と「六朝書」

第一節 近代書人と「六朝書」（日下部鳴鶴・門流以外）

第二節 近代書人の「六朝書」に関する学書論

第三節 近代の日本書壇における「六朝書」の影響と役割

#### 第四章 鳴鶴書の評価と書道史上の位置

第一節 鳴鶴の書美と評価

第二節 日本書道史における日下部鳴鶴

#### 結章

### 【資料篇】

《附属資料Ⅰ》日下部鳴鶴碑刻本図版資料・《附属資料Ⅱ》日下部鳴鶴自筆本図版資料の総数とその内訳

《附属資料Ⅰ》日下部鳴鶴碑刻本図版資料

《附属資料Ⅱ》日下部鳴鶴自筆本図版資料

《附属資料Ⅲ》（その1）日下部鳴鶴年譜

（その2）日下部鳴鶴門流系統図

以上が本論文【研究篇】【資料篇】の目次の概要である。

上記【研究篇】の各章の末尾に小結を置き、ついで本文の注、挿図（一部【資料篇】と重複する図版資料を含む）、および参考文献を掲げる。【研究篇】本文中の作品名と【資料篇】の図版資料が対照できるようにしている。

以下、目次に準じて内容を略述する。

本論文は第一章から第四章までの四部構成になり、その前後に序章と結章を配置する。

序章は第一章以下の本論に入るまでの導入として設定されている。

まず「研究動機」では、近代日本書道史における中国書法の摂取において、明治から昭和戦前期は質・量ともに他の時代を圧倒しており、それらが日本書道の近代化に大きな役割を果たしたとする一般的な見方を認めつつも、グローバル化が始まった近代の日本書道においても日中両国間の関係のみ強調されているのに対し、台湾や朝鮮半島など東アジア諸国と、日本との書道交流がほとんど研究の対象外にある現状に大きな疑問を投げかけている。この問題を解消すべく、稿者は2004年国立台湾芸術大学大学院に入学し、日本と台湾との書道交流をテーマとする研究の機会を得て、修士論文として『「昭和書豪」山本竟山—日本治台時期旅台書家研究』をまとめている。研究の結果、明治・大正時代を代表する書家・日下部鳴鶴（1838～1922）の高弟・山本竟山（1863～1934）が1904年から1912年までの8年間、台湾総督府に奉職の傍ら、書画活動に携わり、台湾の書画壇の発展に大きく貢献したことを確認した。他にも日中両国から多くの書家が台湾に渡り書活動が盛んであったことを知り、台湾が東アジアの書道交流上、重要な役割を果たした地域であることを再認識したとする。その後も竟山およびその師・鳴鶴を中心とした近代書道の研究を続行するうちに、彼らが体験し書学の基盤とした「六朝書」とは如何なるものか、それらが果たした役割を解明したい、といったことが本論文の研究動機となった。

次に「研究目的」として、

- 1、幕末から明治初期における「六朝書」の伝播と受容について整理を行い、近代に至った経緯を明らかにする。
- 2、近代日本書道史を中心に、同時期の中国・台湾の書法史についても整理を行い、「六朝書」が普及した要因やその影響について考察を行う。
- 3、現存する日下部鳴鶴碑刻本および同自筆本に焦点を当てながら、その書法を精細に分析するとともに、鳴鶴が確立した書法の中に「六朝書」がどのように位置づけられるかを考究する。
- 4、近代の日本書壇と「六朝書」に関わる書人についても比較研究の対象とし、鳴鶴との共通点や相違点を導き出す。
- 5、鳴鶴の書業とともに彼が及ぼした影響を捉え、日本書道史上の位置づけを行う。

以上の5項目が示されている。

さらに「六朝書」の定義について述べる。中国史でいう「六朝」は、呉・東晋・宋・齊・梁・陳の6国が都を建康（現・南京）に置いたことから、三国の呉から隋が南北の統一を果たす222年から589年まで、南朝の立場での時代呼称とする。その一方で、日本の書道史において、樋口銅牛・中村不折・日下部鳴鶴らの見解を参酌し、稿者は「六朝書」を仮に「三国以降、隋が南北の統一を果たすまでの南北朝の楷書碑」と定義付けする。

第一章の「近代東アジアの書史と「六朝書」」では、近代における中国書法史、日本書道史、台湾書法史の3節に分けて概観し、その中で「六朝書」に関連づけて考察している。

第一節「近代中国書法史と「六朝書」」（清朝～中華民国）では、①清朝における考証学と金石学、②帖学主流期（清初から乾隆・嘉慶）、③碑学主流期（乾隆・嘉慶以後）、④中華民国期の4期に分けて概観する。上記①において、考証学の一領域とされる金石学が盛んとなり、碑や金文が学書の対象となったことは大きな変革であり、必然的に碑への関心が高まりを見せたと見る。②帖学主流期（清初から乾隆・嘉慶）では、帖学派が主流を占めた時期として、帖学に貢献した事業を取り上げている。③碑学主流期（乾隆・嘉慶以後）では、碑学派の台頭とその発展があった最盛期として、鄧石如・包世臣・阮元・楊守敬らを登場させ、多くの書論を例に学説の論争を交えて展望する。④中華民国期は、一例として西泠印社の誕生と呉昌碩の活躍をはじめ、この期の碑学と帖学について述べる。

第二節、「近代日本書道史と「六朝書」」では、①幕末から明治初期の書、②楊守敬の来朝と明治中後期の書、③大正時代から昭和戦前期の書の三期に分けて考察する。

①では、「幕末の三筆」といわれる市河米庵・巻菱湖・貫名菘翁の三者の書流は明治に入ってから勢力を留め、その影響下にあった書壇を概観する。②は、1880（明治13）年、楊守敬が清国公使何如璋の招きにより多数の碑版法帖を携えて来日、これに啓発された日下部鳴鶴・巖谷一六・松田雪柯らは楊守敬と積極的な交流を行った。その後、中林梧竹や日下部鳴鶴らも大陸へ渡り、著名な文人・学者との交流をはかり、周秦の金石文や漢碑・六朝北碑などの豪放雄大かつ素朴な書が我が国にもたらされ、日本でも一大流行した経緯を述べる。明治33年以後、書道団体の結成が相次いで生まれ、20世紀へ向けて書道界が始動する状況を概観する。③では、明治に活躍した書人も、大正に入り相次いで物故して書壇が一時衰退を見たが、再び活性化し、鳴鶴の門流、近藤雪竹・丹羽海鶴・渡邊沙鷗・山本竟山・比田井天来らの活躍に注目する。これに次ぐ勢力に西川春洞の門流を掲げる。鳴鶴逝去後、これら二大潮流をもとに日本書道作振会が結成され、その後、昭和にかけての書壇の盛衰を述べている。

第三節「近代台湾書法史と「六朝書」」（明・清・日本統治時代）では、①明朝統治時代の書、②清朝統治時代の書、③日本統治時代の書、の3期に分けて展望する。①では、17世紀初めに東インド会社が台湾島を領有後、台湾史上初めての漢民族政権として鄭成功が統治した経緯を述べ、鄭成功の書の遺品を取り上げる。②は、台湾に派遣された官吏による帖学系統の書が大半を占め、その後大陸での金石学や碑学派の勃興による影響が波及し、呂世宜の渡台がもたらした金石・碑刻資料により従来帖学志向から碑学兼修の傾向へと変化した時期と捉えている。③は1895年から1945年までの50年間、台湾の書が、清朝時代の漢文化の遺風とともに、日本の統治によって和 문화が台湾文化に溶け込む一方で、書道団体が発行する雑誌等の書籍や展覧会などにより、新たな変革を求めた時期として把握する。帖学・碑学など多様な系統の書が台湾の多数の書人によって展開され、日本から渡台した、鳴鶴直系の弟子、山本竟山・丹羽海鶴・西川萱南・比田井天来ら書人にも注目する。

第二章「日下部鳴鶴の書業と書法の基盤」では、鳴鶴の生涯を辿り、ついで日下部鳴鶴碑刻本と同自筆本とによって鳴鶴の書業を概観し、鳴鶴の確立した書法がいかなる学書や書論に基づいているのかを確かめ、併せて鳴鶴門流書人らによる鳴鶴書法の継承を考察している。

第一節では鳴鶴の伝記を略述する。1838（天保9）年8月18日に近江彦根藩士田中惣右衛門因丈の次男として江戸の藩邸で生まれ、22歳の時、実父の実家・日下部家の養子となり、のち藩士として仕えた井伊直弼が桜田門外の変で暗殺され、養父は殉死し、23歳で日下部家を嗣ぐ。1868（慶応4）年9月8日、明治と改元、新政府誕生とともに鳴鶴は「徴士」に任命され、勤勉実直な人柄から太政大臣・三条実美、内務卿・大久保利通らの厚遇を受け、太政官の大書記へと昇進、正五位に叙される。1878（明治11）年に大久保利通が暗殺された翌年に鳴鶴は42歳で辞職する。翌年、楊守敬が来日する。その後、1907（明治27）年、鳴鶴ら30人の発起人により談書会が発足、文人墨客との交流が開かれ、1913（大正2）年には鳴鶴は野村素軒・今泉雄作・正木直彦とともに、蘭亭修禊記念会を日本橋倶楽部で開催する。とりわけ、鳴鶴は旅を好み、1881（明治14）年から逝去するまで41年間、各地の名所旧跡を漫遊し、詩を吟じ書作に専念したと伝える。

第二節「鳴鶴の書業一日下部鳴鶴碑刻本と自筆本一」は、本論文のもっとも核となる重要な部分である。【資料篇】の《附属資料Ⅰ》日下部鳴鶴碑刻本図版資料および《附属資料Ⅱ》日下部鳴鶴自筆本図版資料のデータを基本にして、鳴鶴の書業および書法を的確に把握すべく、それぞれ基準作例となる資料が収録されている。本論文においては、Ⅰ碑刻本図版資料、Ⅱ自筆本図版資料、ともに執筆年・制作年の明らかなものを採用し、挿図と併せてそれらの遺品と対比しながら書の筆法や書風について考察を加えている。挿図の一部は、前掲《附属資料》のⅠおよびⅡに収録されており、それにより鳴鶴碑刻本・鳴鶴自筆本の現状が把握できるように、挿図の脇に《附属資料》のⅠおよびⅡの図版番号を付して対照できるようにしている。

本節では先行研究を取り上げ、石橋犀水以下4件の所説を紹介するが、自らも実際に上記の鳴鶴碑刻本・同自筆本を用いて、中国書法史上の遺品と比較対照しながら考察を試みている。その方法は、まず碑刻本楷書・碑刻本隸書から始め、ついで自筆本楷書・自筆本行草書・自筆本隸書の順に中国書法の遺品と図版で比較しながら鳴鶴書法の特徴を指摘する。その結果、稿者は鳴鶴の生涯における書風展開を以下のように区分を試みている。

第一期 学書探求期（45歳以前）

第二期 「六朝書」傾倒期」（45歳～50歳）

第三期 鳴鶴書法成熟期（50歳～73歳）

第四期 鳴鶴書法集大成期（73歳～85歳）

本論文に収録した鳴鶴碑刻本・同自筆本図版資料の総数については、【資料篇】の冒頭に掲げた一覧によって知ることができるが、そのうち碑刻本図版資料（データのみの資料は除く）について見ると、全86点のうち66点と、その多くが楷書体である。稿者は楷書の書風変遷について、幼少期に学んだ巻菱湖の影響を指摘し、次に顔真卿や褚遂良といった唐代の楷書が加味され、さらに1880（明治13）年に楊守敬の来朝とともに碑版資料によって学んだ「六朝書」の影響が顕著になり、それが具体的な形として示されたのは、45歳筆の「埜崎君碑」の頃からと見ている。その後は唐代の楷書に「高貞碑」や「鄭義下碑」・「張猛龍碑」など、いわゆる「六朝書」を組み

合わせて書風が形成されたと推考する。ただ「六朝書」を重視する一方で、唐代の楷書の構造や用筆法も散見するため、鳴鶴は「六朝書」一辺倒ではなく、内に発する力を「六朝書」の特に北碑の雄健な部分を、整齐かつ緊密な結構を褚遂良はじめ初唐の楷書碑に依っていると見なす。そしてその集大成が、1910（明治43）年73歳の時に書された「贈右大臣従一位大久保公神道碑」であり、鳴鶴の楷書の完成期を迎えたとする。一方、碑刻本隷書は楷書の遺品に比べて数は少なく26点を数える。その基盤とするものは「石門頌」「西狹頌」「張遷碑」など蒼勁古拙・方勁雄偉なところと、「礼器碑」の精妙で性情形質の兼備する完成度の高い書法との調和を目指したと推察する。

自筆本図版資料は136点を取り上げる。そのうち行草書が101点（画賛を含む）と圧倒的に多く、次いで隷書が26点、そして楷書が12点を数える。自筆本楷書を碑刻本楷書と対比してみると、書風の変化や時代区分の観点から推してほぼ同様な書風展開と受け止めている。しかしながら、碑刻本と自筆本とは、それぞれの性格や目的による違いがあると見て、前者が緊張感に満ちた書風であるのに対し、後者は自由闊達な書風を形成すると判別する。鳴鶴の行草書は、行書は王羲之の「蘭亭序」「集王聖教序」、草書は孫過庭の「書譜」といった晋唐時代の王羲之系統の古典を基盤とする見方がなされている。そして「六朝書」に触れる以前の行草書は貫名菘翁の影響があったが、「六朝書」を摂取してからの作品には、楷書で鍛え上げた書法を行草書に取り込もうとした様子が窺えるが、その結果、行草書の書風は骨力が強く重厚な印象が看取され、作品の趣がこちこちに硬い雰囲気を醸成する面を難点とする指摘が示される。よって鳴鶴の行草書は、「六朝書」の摂取によって変化した楷書の影響を多大に受ける形で展開したと結んでいる。

自筆本隷書については先に示した「石門頌」以下、中国書法の古典が基盤とされ、楊守敬の来朝によって、これらの漢隷が一大流行するが、日本における本格的な漢隷研究は鳴鶴に始まるといっても過言でないと断じている。

なお、上記の鳴鶴碑刻本・同自筆本以外に、鳴鶴の書簡や詩稿などの存在も紹介するが、本論文では関連資料として位置づけるに止めている。

第三節「鳴鶴の学書論」では、先行研究をもとに、①学書論の関連資料、②鳴鶴の師、③鳴鶴の学書論の背景、④鳴鶴の学書論とその伝達、といった各項目において考察がなされている。①学書論の関連資料において、主として中国歴代の書論に注目し、それらを参酌した鳴鶴の「学書論」を掲げる『鳴鶴先生学書経歴談』『書訣』『鳴鶴先生叢話』などの著述や、楊守敬との筆談記録として『書藝』（楊守敬特輯号）第4巻、『八稜硯齋随録』（楊守敬筆語用筆訣）などを紹介する。②鳴鶴の師では、その学書論において生涯私淑した貫名菘翁、明治13年に来日した楊守敬、およびその師・潘存の所説によるところが大きいと見る。③鳴鶴の学書論の背景において、貫名菘翁および楊守敬・潘存の三者を学書の基盤とした背景を具体的に示す。それらの一端を窺うと、『鳴鶴先生学書経歴談』では、鳴鶴は楊守敬を「金石学者ニシテ。歴代ノ碑帖ノ学ニ長シ。并ニ書法ニ委シキ学者」と認識する。また、「六朝書」との出会いにあたり、鳴鶴は自身を「秦漢ノ篆隸」および「六朝楷書ノ法」研究の第一人者として自覚し、唐代の書に偏重する姿勢の学者や書家に対して強く批判している。また『鳴鶴先生叢話』で「六朝書」を中唐以降に中国から日本に伝わった「俗気」を帯びた書を治療するものとして位置づけ、そうした「六朝書」を流布

することが自身の使命であると認識していたとする。鳴鶴が神田香巖巖に宛てた書簡に楊守敬所蔵の碑帖は皆精拓品であると述べ、その蔵品を歴覧した鳴鶴の楊守敬に対する評価が極めて高いものであったことを物語る。④鳴鶴の学書論とその伝達において、「学書に対する姿勢」と「書技に関する学書論」について考察するが、とくに後者では「鳴鶴の用筆法と執筆法の根拠」および「鳴鶴の用筆法と執筆法の具体的内容」に分けて詳述する。従来、鳴鶴の学書論は楊守敬との出会いによって得られた知識が骨子となる見方が大勢の考えであるが、楊守敬が帰国後の鳴鶴は、楊守敬の説だけでなく、生涯私淑した貫名菘翁や日中の古代から近代に至るまでの書や書論を通じて鳴鶴自身の書理論が完成されたとする。結論的に稿者は、書の基盤を「六朝書」と「初唐の三大家」をはじめとする整齊な書法に心血を注ぎ、「廻腕執筆法」など書技に関する学書論を示して多くの作品を書き残すことにより、「規範」や「典型」の確立に努力したこともまた、書の「本質」「在り方」「果たすべき役割」の表れと見ることができる、と説明する。他方、「書道清濁論」で提示した「真に書道の発展を念とする」の言を実践すべく発信した「伝達」行為が、近代日本書壇の多くの人々によって「受容」され、現代へと継承されたと結論する。

第四節「鳴鶴門流書人と鳴鶴書法の継承」では、鳴鶴に学んだ代表的な門人たちがどのようにその書法を継承したものなのか、各門人ごとに考察している。取り上げた書人は、黒崎研堂・渡邊沙鷗・山本竟山・近藤雪竹・丹羽海鶴・岩田鶴皐・井原雲涯・比田井天来・木俣曲水・西川萱南・田代秋鶴・川谷尚亭・吉田苞竹であり、これらは近代日本における漢字書道の名手として著名な人物であり、それぞれ鳴鶴からは用筆法とともに、書の古典とされる中国の碑法帖を介して指導を受けたことが窺える。たとえば楷書では顔真卿・鄭道昭、行書は王羲之、草書は孫過庭、隸書は「張遷碑」といったものが対象であったと見ている。

42歳で官を辞して書人としての道に始まった鳴鶴の「書」による生活手段として、「門人を多く作る」「作品を多く売る」「碑銘などの揮毫に進んで応じる」といった三要素を挙げ（中西慶爾）、またそのために全国漫遊の目的として「生計の糧を除けば第一に、自己の書の普及を通じた正しい書壇の確立と育成にあった」（岡村鉄琴）とする説を取り上げ、そうして得られた門人たちの活躍と彼らの紹介により全国各地に鳴鶴の書が伝播し、継承されたと考察する。

第三章「近代の日本書壇と「六朝書」」では、「六朝書」に関わる近代の書人が、鳴鶴門流のみならず、他に次のような人物を取り上げている。

第一節「近代の書人と「六朝書」（日下部鳴鶴・門流以外）」では、巖谷一六・中林梧竹・北方心泉・前田黙鳳・西川春洞・宮島詠士・中村不折、および松田雪柯を代表的な人物として挙げている。巖谷一六と松田雪柯は鳴鶴とともに多くの碑版法帖を実見し、自らの書法形成に役立っている。中林梧竹ははじめ市河米庵の門下・山内香雪に学び、のち清国に渡り潘存に師事し、六朝書を中心に多くの碑法帖により研鑽を積み、きわめてユニークな書法を確立する。また、西川春洞も徐三庚「出師表」のほか、「六朝書」への傾倒がその書法形成に繋がった。本節ではその他、上記に示した人物についても碑法帖との関わりを指摘する。

第二節「近代書人の「六朝書」に関する学書論」では、鳴鶴および鳴鶴の門流以外で「六朝書」を学んだ書人のうち、学書の過程を記録に留めたり、体系的に整理し、書籍として刊行されても

いる。本節では、第一節で取り上げた中林梧竹・中村不折の著書の中から「六朝書」に関する見解を抄出している。『新編 梧竹堂書話』（日野俊顕著）には梧竹の学書論が49則の内容で構成されているが、そのうち「六朝書」に関するものは、都合7則あり、それぞれの項を紹介し、考察する。次に中村不折による『六朝書道論』は、康有為の著『広芸舟双楫』の訳述であり、その自序において自ら美術家の立場で六朝書を「美術品」として西洋的な見地から、矛盾や疑問を指摘する。

第三節「近代の日本書壇における「六朝書」の影響と役割」では、近代の日本において「六朝書」の移入は、楊守敬の来日を契機としたことは既述の通りであるが、それとは別ルートによって「六朝書」が持ち込まれた経緯があるとし、いくつかの例を抄出する。中村不折・井上靈山共訳『六朝書道論』に、犬養木堂による「六朝書」を学ぶ人への警告的批判を掲げる。高村光太郎も中村不折への不満を漏らし、六朝の碑碣そのものには美的価値を示す一方で、近代における派生作品には厳しい眼差しで批判を浴びせている。稿者は、こうした門流や書壇という組織作りの体制とその後の発展の中において、「六朝書」は「新世代の書家たちが前世代から継承した書の中に求めた理想や対象の一つとして、彼らが自己の思想を表現しようとした、いわゆる〈芸術書〉意識の昂まりの中で新たな役割を担いながらその姿を留めていった」と考察する。

第四章「鳴鶴書の評価と書道史上の位置」の第一節「鳴鶴の書美と評価」において、近現代の書家や学者による鳴鶴観とその評価に関し、批判的に考察を加えている。石橋犀水・松井如流・桑原翠邦・金子鷗亭・宇野雪村といった鳴鶴門に連なる人々の意見は主観的傾向を見せるが、今井凌雪は冷静で客観的な見解を示し、青山杉雨はその書を通じて現代書のあり方に警鐘を鳴らしたと見ている。学者からの評価では、神田喜一郎は楊守敬の来日により六朝書道に専心するようになったことは、日本書道のために好結果をもたらしたかどうか疑問をもつ、と述べる。その他、鳴鶴の書業に対し「柔媚な仮名書の伝統に骨力が勝った雄渾素朴な六朝書はどうしても合わなかった。この様に、彼の生んだ弊害もある程度は認めざるを得ないが、彼の書壇に果たした役割はそれを打ち消すほど大きい」（太田剛）との見解に対し、妥当な評価と見ている。さらに「日本に残存する唐人の真跡や写経の重要さに注目したのは菘翁の卓見であるが、鳴鶴もこれに共鳴したことは疑いない」（日比野丈夫）と鳴鶴の高い見識を指摘する。

他方、台湾日治時代に発行された1910（明治43）年の『台湾日日新報』に鳴鶴に対する否定的な記事が掲載されている。その他、「鳴鶴は用筆上は古法の典を得た一大家であった。が、処々に見られる線質の平板さは、用筆—いわゆる古法—に観点を重く置き過ぎた為に、運筆の重要性が軽く見られがちであった点に起因している」（鈴木史楼）との批判的な評の一方で、師・鳴鶴が門弟・山口蘭溪に「飄逸の趣」について語った例を引き、稿者は「飄逸の美」は技術の高さで表出されるものではなく、まず人間が優れていること、すなわち「書者心画也」「心正則筆正」が必要とされ、それによって真の「書」が生み出される、と鳴鶴自身の書論を交えながら結ぶ。

第二節「日本書道史における日下部鳴鶴」において、日下部鳴鶴は、大久保の暗殺により官を辞し、書家一筋の道に邁進することになったが、こうした運命が鳴鶴の生涯を決定づけ、また楊守敬の碑版法帖を携えての来日によりその後の鳴鶴の書法を一変させ、近現代書道史における「六



朝書」の重鎮として輝きを見せるに至ったとする。それらは、後に自ら清国に遊び、楊岷・呉大澂・呉昌碩らと書学の交流を図り、国内においても多くの優れた門流として、近藤雪竹・丹羽海鶴・渡邊沙鷗・山本竟山・比田井天来らを輩出し、その流れは現代の書壇にも及んでいる。鳴鶴は隸書、楷書、行草書のいずれも優れ、伝統的な日本書道に加えて、中国書法、中でも「六朝書」を受容し、自らの書風の基盤としたと見ている。

日本が台湾を統治する1895年から1945年までの50年間、鳴鶴から派生して門下の山本竟山他によってその書流が台湾へと伝播し、清国から日本へと受容された「六朝書」が別な姿で継承され、書の移植がなされたと推察する。これに清国から台湾への書文化の伝播も検証する必要がある、そこには日本の統治による50年間において、それ以前の底流として残された台湾の書文化に日本の書が合流したとも受け止められる。今後、幅広い情報資料収集により、日台両国の書文化の実情がさらに解明されることを今後の課題としている。鳴鶴の日本書道史上の位置づけとして、鳴鶴の書の評価を考察し、とりわけ鳴鶴という人物がもつ「内面の美」を感じ取ることが出来たとする。同時に鳴鶴自身に書の「本質」「在り方」「果たすべき役割」の追求があったことが提示され、これらによって、稿者は鳴鶴に対して「書の復古主義の先駆者」であり、日本の書を近代化へと導いた「書の変革者」であり、さらに「近代日本書道の祖」と位置づけている。

結章では、本論文の結論をまとめている。本論文では「六朝書」の伝播と受容について取り上げ、それらは日下部鳴鶴を中心に近代日本に根づいていったことを考察した。それは日本のみならず同時代の中国・台湾の書法史にも対比させながら眺めてきたが、日中の関係、日台の関係はそれぞれ異なる書文化交流として捉えられ、その中で日本が「六朝書」を受容し、それがさらに普及し台湾にも伝播したことも確認された。それらを検証する意味で、現存する日下部鳴鶴碑刻本および同自筆本に焦点を当てながら、その書法を中国書法と比較分析することによって、鳴鶴が確立した書法の中に「六朝書」がどのように位置づけられるか、次第に見えるようになり、それらは近代の日本書壇と「六朝書」に関わる書人についても比較研究の対象とすることによって鳴鶴の位置づけがより具体的に浮き彫りにされたと見ている。さらに制作年代の明らかな鳴鶴の書を展望するにあたり、碑刻本と自筆本に分類し、各書体ごとに書風あるいは書法を観察することによって、鳴鶴の書法を形成する書美が具体的に裏付けられたとしている。そして、本論文においては、鳴鶴の活躍やその影響を通して、従来、あまり顧みられることのなかった、近代日本における「六朝書」の受容と展開について、具体的な実態やその果たした役割など、書道史上の一端を解明することが出来たと述べる。

## 2. 論文の審査内容および評価

本論文の審査内容および評価について、以下、論文全体および各章にわたり述べていきたい。まず、本研究の高く評価すべきは、書道学でもっとも必要とされる書道史上の遺品がまとめて収録されている点である。本論文は【研究篇】と【資料篇】の両篇に分かれるが、【研究篇】の本本文中に必要な個所は挿図を取り入れており、【資料篇】では、さらに精細に本研究に不可欠の《附

属資料Ⅰ》日下部鳴鶴碑刻本および《附属資料Ⅱ》日下部鳴鶴自筆本の図版資料にそれぞれデータを添えて編年順に配置している。図版資料は現存する中国書法史や日本書道史の遺品を知る上で重要であり、それによって現状を知る手がかりが得られ、書風の特徴を把握し、書法の細部にわたる観察が可能となる。

【資料篇】で採用した図版は原則として制作年代が明らかな遺品であり、日下部鳴鶴碑刻本は総点数152点（データのみを含む）を数え、そのうち図版資料に86点が収録されている。データの各欄には、碑刻本では①作品番号、②名称、③数量、④品質形状、⑤法量、⑥制作年、⑦年齢、⑧所在地、⑨作品掲載資料、⑩使用書体、の10項目がある。自筆本では総点数139点が収録され、①作品番号、②名称、③形態、④数量、⑤品質形状、⑥法量、⑦制作年、⑧年齢、⑨所蔵者名、⑩本文積文、⑪落款積文、⑫引首印、⑬落款印、⑭その他印、⑮作品掲載資料、の15項目が用意されている。本論文において、これらの図版資料が果たす役割は甚大である。ただし、採用された遺品のすべてが同レベルとは言い難く、今後、各遺品について鳴鶴書法の個々にわたる優劣を含めた厳しい評価が施される必要があるだろう。

次に【研究篇】の各章にわたり通覧していきたい。序章では、研究動機と研究目的を掲げ、題目に掲げる近代日本における「六朝書」と「日下部鳴鶴」がキーワードとして示される。研究動機から発展して研究目的への流れが見え、「六朝書」の概念を整理し、東アジア三国における交流の歴史を概観し、近代の日本書道史において日下部鳴鶴が確立した書法とともに鳴鶴書の中に「六朝書」がいかに位置づけられているか、といった問題意識が窺える。本論文では考察する都合上、稿者は「六朝書」を仮に「三国以降、隋が南北の統一を果たすまでの南北朝の楷書碑」とするが、従来、厳密に定義づけられているものではなく、近代日本書道史において、「六朝書」なるものがどのようなものを指すものであるか、一応の整理を試みたものと窺える。

第一章では、「近代東アジアにおける六朝書」として中国書法史・日本書道史・台湾書法史を3節に分けて概観しているが、その中で「六朝書」に関連づけた内容は三国によって異なるが、近代の東アジアにおける国際交流の接点が垣間見える。

第二章「日下部鳴鶴の書業と書法の基盤」では、本論文の主要な部分である。まず第一節で鳴鶴の生涯を展望し、書の道に入る経緯を述べ、その後書壇における日中交流を含む活躍から他界に至るまでを前言として述べる。第二節において、《附属資料Ⅰ》日下部鳴鶴碑刻本および《附属資料Ⅱ》日下部鳴鶴自筆本の図版資料を観察し、その中からいくつか鳴鶴書法と中国書法との図版資料による文字比較が試みられ、具体的にどのような中国書法の影響によって鳴鶴書法が確立されたか、「六朝書」がどのように取り込まれているのか、といった点をおよそ窺い知ることが可能である。文字比較の方法は、中国書法と鳴鶴書法を左右に同じ文字を置いて対比できるようにしている。そこには鳴鶴の中国書法を学習した成果が何らかの形で示され、それに対する視点も的確といえる。なお、さらなる図版資料の駆使が希求されるが、今後別の機会に分析を望みたい。文字比較の方法に注目すると、碑刻本楷書、碑刻本隸書、自筆本楷書、自筆本行草書、自筆本隸書の順に、文字ごとに書法の異同を観察する方法は書体別で分かりやすい。稿者は、その結果、それまでの先行研究を参考にしながら、鳴鶴の生涯における書風展開を、次に示すような四期に分類している。

第一期：学書探求期（45歳以前）、第二期：「六朝書」傾倒期（45歳から50歳）、第三期：鳴鶴書法成熟期（50歳から73歳）、第四期：鳴鶴書法集大成期（73歳から85歳）。これらの名称、および年齢区分は、必ずしも厳密ではなく、書体別に判断する基準もあり、多少、年代的にも書風が入り組んでおり、検討課題を残しながらもおおよそ妥当な見解と見なされよう。

以上、4期に分けて通覧した結果、鳴鶴による「六朝書」の影響は、第二期あたりから芽生え傾倒する様子が推察されることを指摘する。注意点は、同時期のものすべてが同一傾向ではなく、書体により異なることなど、全体を広い視野で見据えることが肝要である。その点、鳴鶴書法の「六朝書」の介入は、当初、「六朝書」の定義を「三国以降、隋が南北の統一を果たすまでの南北朝の楷書碑」としていることでも明らかのように、「六朝書」はもっとも顕著に鳴鶴の楷書書法にストレートに影響が及んでおり、本章において、そうした実例が示される。たとえば、45歳の「埜崎君碑」の頃から「六朝書」の影響が見えるのも、それは書風全体でなく、結構や点画のある部分に表現が溶け込んでいる、と受け止めている。本論文で取り上げた海外で確認できる鳴鶴の碑刻本として第三期に該当する71歳の建碑「枋橋建学碑」（台湾台北県板橋市板橋国民小学校）は、すでに「六朝書」の影響を留めた遺例として位置づけており、この2年後の73歳の時に成った「贈右大臣従一位大久保公神道碑」は鳴鶴の楷書書法の完成された代表作として再確認している。稿者は、こうした鳴鶴の楷書書法が初唐楷書の整齐かつ緊張した結構に依ったとし、内に発する力を「六朝書」の北碑の雄健な部分に求めたとし、鳴鶴書が「六朝書」一辺倒でないことを見定めている。また、鳴鶴の碑刻本隷書は、少ない遺品ながら水準の高い世界を生み出したと見ている。

次に自筆本楷書、自筆本行草書、自筆本隷書について一望すると、稿者は自筆本楷書について、碑刻本と共通的な位置づけをしながらも、両者の性格や目的の違いから表現される世界も書体は同じながら趣の違いを区別する。自筆本行草書については、王羲之「蘭亭序」や同「集王聖教序」あるいは孫過庭「書譜」の顕著な影響が見え、そうした行草書の中に鳴鶴が習得した「六朝書」が分け入っていると、それが行草書の書風展開に硬さをもたらしたと、マイナス面の要素としてとらえている。また、自筆本隷書については、楊守敬の来朝によって漢隷が一大流行するが、稿者は日本での漢隷研究は鳴鶴に始まると断じている。本章では、以上のような碑刻本・自筆本の各遺例を通覧し、その中に「六朝書」が取り込まれている状況が解き明かされている。

章末尾に「鳴鶴の学書論」が付され、鳴鶴の書法の確立から門流書人への継承の過程が示されている。その中で鳴鶴の学書の基盤となったのが、貫名菘翁・楊守敬・潘存の三者であるが、そのうち楊守敬の存在が強調されている。これらに次いで稿者が特筆する点は、鳴鶴の用筆法と執筆法である。それらが近代日本書壇の多くの人々によって受容され、現代へと継承されたと結論するが、現時点の用意された文献を見た限りでは、正確な実情を把握することはかなり困難で具体性を欠き、今後多くの課題を残す結果となった。

第三章「近代の日本書壇と「六朝書」」では、「六朝書」に関わる近代の書人のうち、鳴鶴およびその門流以外を取り上げている。巖谷一六・中林梧竹・西川春洞ほか当時の代表的な書人を取り上げ、それぞれの活躍を個別に考察している。そのうち中林梧竹の『梧竹堂書話』および中村不折の『六朝書道論』を掲げ、これらにより「六朝書」に対する見解や、「六朝書」が必ずしも正

しく受容されず、当時の「六朝書」に対する批判を伝える資料として取り上げており、その是非を含めて紹介している点で時代の風潮が窺われて興味深いものであるが、それは「六朝書」に対する認識の曖昧さを露呈したことにもなる。

第四章では「鳴鶴書の評価と書道史上の位置」では、近現代の書家・学者の意見について、台湾日治時代の発行になる『台湾日日新報』の否定的な記事なども含め、賛否両論を交えながら、鳴鶴の位置づけを試みている。こうした批判的な評に対して稿者が取り上げたのは、鳴鶴がその門下・山口蘭溪に語った「飄逸の美」についてである。「飄逸の美」は技術の高さで表現できるものでなく、「書者心画也」「心正則筆正」が必要とされ、これが「真」の書を生み出す源泉とした鳴鶴書論の一節を取り上げ、鳴鶴がもつ書の本質を披瀝する。加えて鳴鶴自身に書の「在り方」「果たすべき役割」の追求もあったと推察する。鳴鶴の日本書道史上の評価として、台湾の日治時代に1895年から1945年までの50年間に、鳴鶴から派生した門下の山本竟山他によってその書流が台湾へと伝播し、清国から日本へと受容された「六朝書」が別な姿で継承され、書の移植がなされたこともその一つと見なされた。そして、稿者は鳴鶴の書道史上の位置付けとして、鳴鶴の書に対して「内面の美」を感じ取ることができたとするが、果たして「内面の美」とは、具体的にどのようなものなのか。前述の「飄逸の美」を指すのだろうか。この点をさらに掘り下げて考察する必要があるだろう。そうした検証がなされてこそ、鳴鶴の評価に直結すると考えられる。ともあれ、稿者が鳴鶴に対し、「書の復古主義の先駆者」であり、日本の書を近代化へと導いた「書の変革者」であり、さらに「近代日本書道の祖」であると位置づけたことは、首肯されるだろう。

結章で全体のまとめとするが、「六朝書」の伝播と受容について取り上げ、それらは日下部鳴鶴を中心に近代の日本に根づき、それらは日中または日台の国際交流の中でも捉えられ、さらに、それらは図版資料によって鳴鶴の書法を形成する書美として裏付けられたとする本論文には一つの成果が窺える。本論文は今後の近代日本書道史研究において、日下部鳴鶴の書に関する基礎的資料として、参考に資すること疑いない。今後、本論文を基点にさらなる考察が切望される。

### 3. 結論

以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士（書道学）学位審査委員会は、全員一致で香取潤哉氏が博士学位を授与するに適格であると判断し、ここに報告する。